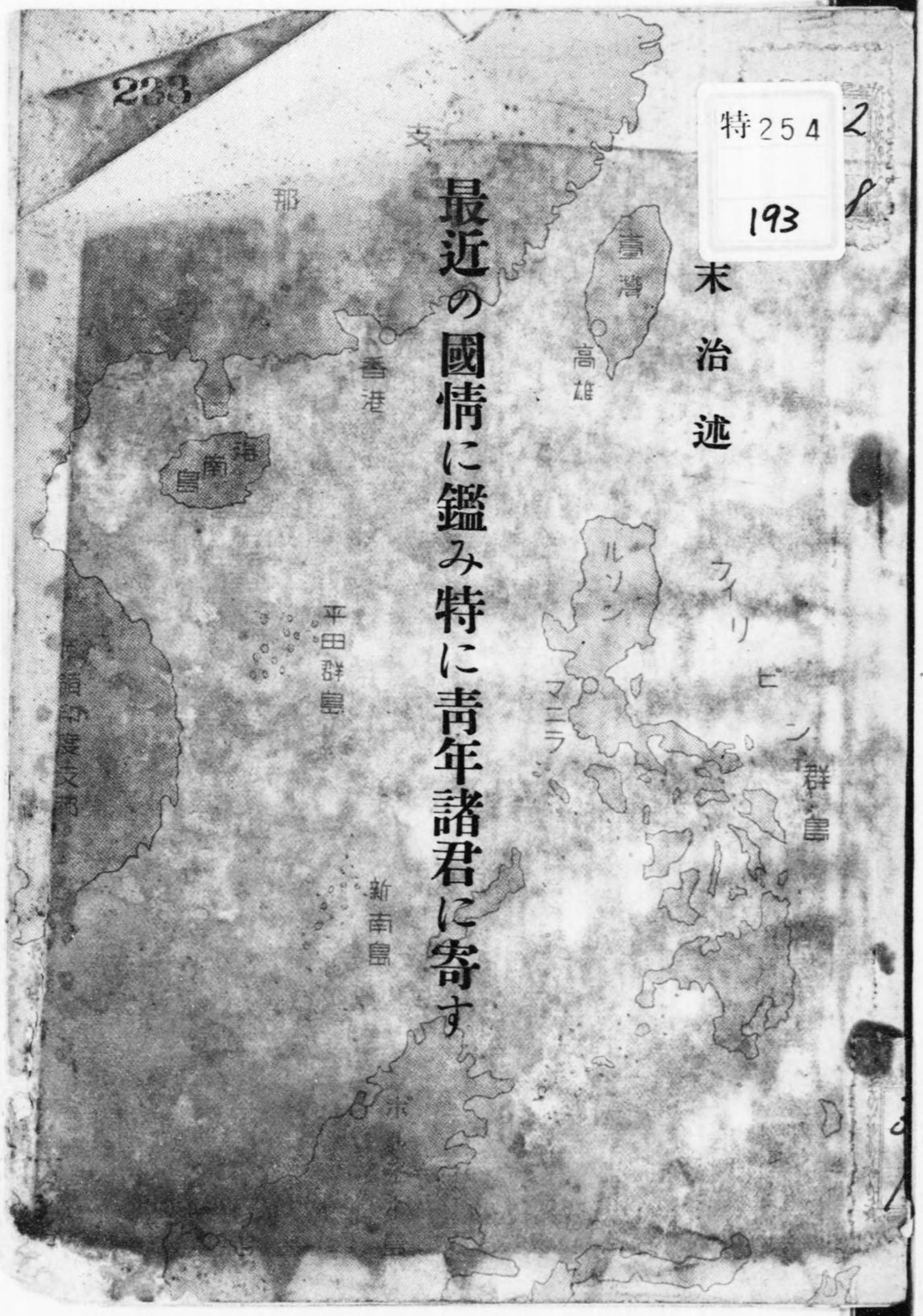

2

0001512000

0001512-000

特２５４－１９３

最近の国情に鑑み特に青年諸君に寄す

平田末治・述

平田末治

昭和１１

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特254
193

最近の國情に鑑みて特に青年諸君に寄す

目次

一、緒言……一
二、産業日本の概歴……四
三、目的達成に到らんとする日本産業……九
四、弱國の貴族よりも強國の勞働者……一三
五、世界資本主義の現狀……一五
六、勞資は對立抗爭すべきものに非ず……一八
七、他人の煽動に自家を滅ぼす勿れ……二〇
八、施政上の大本、人心の和……二四

九、領土か然らずんば外交……二七
一〇、平田群島……三一
一一、當面せる軍事的危機……三四
一二、結論……三七

著者と平田群島

ダンカン島全景

バツトル島に於ける燐礦石積取
（平田群島創業當時第一船第二元山丸）

最近の國情に鑑みて
特に青年諸君に寄す

平田末治

一、緒言

私は秋田縣横手町に生れ、横手小學校修了後帝都に苦學し、直ちに臺灣、南支、南洋方面に志を立てて裸一貫其地に渡り、爾來今日に及んで居るものであります。

元來、私の家は、横手にあつても多少知られた家柄ではありますが、家産は殆んどなく、剩さへ兄弟は十二人もあつた爲めに、學資の點から申しても、仲々末子の私などには手が屆かず、早くから里子にやられたが、その里子も、云はゞ雇人の小僧同

様な境涯でありました。つまり、少年時代から、人生の辛酸を嘗めつゝ郷土に育つたわけでありますが、今日になつて振り返つて見れば、やはりその當時が一番樂しかつたものか、郷里に對する思慕の情は年を經ると共に、愈々切なるものがあるのであります。

さて、最近郷里に歸へり、久しく見なかつた郷里の姿を見ますると、昔に較ぶれば何にもかも驚くほど變つてゐる。これはひとり私の郷里ばかりでなく何處へ行つても免がれ得ない事ではありませうが、まことに感慨深いものが多いのであります。たとへば思想問題にしても、又都會にばかりあるものかと思つた勞資問題にしても、いつの間にか自分の郷里に迄やつて來てゐて、これが容易ならぬ情勢を展開してゐる。時勢の變轉測り知る可らざることを、ここでも又痛感させられた次第であります。

併しながら、時勢の變化と云ふものは、全然理由なくして起るものではない。善くならうにも惡くならうにも、兎も角そこには何んかの理由がなければなりません。例へば、最近帝都に起つた一大事變の如きでも、事件そのものは、一寸見ればまるで想像も出來ぬ樣な事ながら、では事のこゝに至つた理由が何等認め難かつたと申しますると、そこには矢張り無視することの出來ない一つの重大因由が横はつてゐる。……その重大因由があるために、私達國民の憂悶も一段と深くなり、複雜になつて來るのでありまして、もはや何事にも單純な見解を以つて今の世相を觀る事は許されなくなつてをります。

經濟問題、軍備問題、國際問題、農漁山林問題、勞資問題、そのいづれを取り出してみても、一つとして容易なるものは無いのでありまして、刻下非常時と云はれるものの底を流れる幾つかの暗流を見れば、最近續々として起る國民的悲劇も、果して今後喰ひ止め得るか、喰ひ止め得ないか、全く見當がつかなくなつてゐるのであります。隨つて皆がみな不安になつて來た。誰しもが心配をせずにはゐられなくなつて來た。これはいかん、これはどうにかしなければならぬとそれぞれ深く考へ出して來た。斯

うなつてはもはや政治家や軍人や官吏などのみが心配するよりも、國民全體が心配しなければならない時がやつて來たのであります。

それで、心配する以上どうしても此の時勢に對する十分の知識と正しい認識とが國民にとつて極めて必要だと云ふことになる。國内的にも國際的にも、日本の現狀がどう云ふものであるか、しかしてその現狀を打開するのにはどうしたらばよいか、つまりかゝる御相談のために、今回この印刷物を私は鄕里の皆樣方にさしあげることとなつたのであります。

二、産業日本の概歴

先づ國内狀勢を眺めまするに、第一に國家の經濟であります。昔は日本は農業國でありました。純然たる農業國でありまして工業などと云ふものは一つもなかつた。軍艦だの汽車だの大砲だのと云ふものは勿論、車の輪やシヤボンの如きものさへ外國から買ひ入れたやうな次第で、日清戰爭でも日露戰爭でも、兵隊こそ日本人でありましたが、軍艦、大砲、機關銃などと云ふ武器は殆んど外國から買入れた品物で戰爭をしたのであります。たとへばまるでエチオピアと少しも變らない有樣で、今日でも三十五六歳以上の人ならみな記憶して居られることと思ひますが、こんな狀態ではいくらなんでも心細い、どうしてもこれは日本にも大々的に工業を興さなければならぬと云ふ輿論が起つたのであります。兵隊が強くても武器一つ滿足なものが出來なかつたり、永年戰ひ拔くだけの資金が無かつたりしたならば、結局は諸外國との競爭にも勝てる筈がない。これは强兵も强兵だが、先づ第一に富國と云ふことが必要である、と云ふことで當時は誰しもこの富國强兵と云ふ言葉を實に眞劍に考へ、そしてこれを實行しやうと一齊に奮起したのであります。

その結果、日本にもやうやく僅かばかりの工業が生れ出て來まして、少くとも日本人の使ふものだけは、なんとかして日本人の手で作れるやうにしようぢやないかと云

ふことになつたのでありますが、もともと資金も碌々無いし、技師と云つたところで、みな西洋人に來て貰はなければならない狀態で、殘念ながら當時は舶來ものと云ふと、非常に上等なものとして高い値段でみなどんどん買ひながら、肝腎の日本製品になりますと、安くてもあまりよろこばない傾向があつた爲めに、つまり西洋から見れば、日本はお得意さまで、そのために貧乏な日本が散々儲けられた形になつてゐたのであります。

ところが、大正年間に這入りますと、日本の工業にもいくらかの基礎が出來て參りまして、そろそろ工場らしい工場も出來て來た。つまり今迄は西洋にだけあつた資本主義と云ふものが日本にも生れかけて來なのでありますが、そこへ突然歐洲の大戰亂となつて、バッタリ西洋の物貨が止まつて了つた。さあかうなれば善くても惡くても日本製品で我慢しなければならなくなつたので、急に日本製品が賣れ出す。ひとり國內ばかりでなく、支那南洋方面、遠くは西洋諸國に迄引張り凧となつて、粗製品であらうが濫造品であらうが、無いよりは有つた方がよいと云ふので、思ひの外にこれが外國へ賣り出された。そのために、全世界の金が馬鹿馬鹿しい程日本に轉げ込んで、いはゆる戰時成金が方々に出來る、今迄せいぜい五十錢の日給を取つてゐたやうな職工が、五圓、十圓の日給を取ると云ふ具合だし、假りに十圓の職工を雇つても立派に工場が成り立つと云ふので、わけのわからぬ工場が、ただもう滅茶苦茶に方々に立ち、土地の値段は上がる、米の値段はあがる、蠶は素晴らしい、材木は高くなる、實に何處も此處も金々々で、思ひ出しても怖ろしい程の黃金時代が現出したのであります。勿論これは歐洲戰亂のお蔭ではありますが、同時に又日本に於ける資本主義が國民全體に恩惠をほどこした最初の機會だつたとも云ひ得ることが出來るのであります。

しかるに戰爭が終ると、このやうな狂人景氣がバッタリ終熄し、工場は片つぱしから倒れる、職工は解雇される。立所に倒產、失業、食糧問題が起ると云ふ騷ぎで、俄然勞資問題がここに生じて來たのであります。

若しこれが、あの戰爭景氣がいつ迄も續いたとすれば、果して勞資問題が起つたかどうかまことに疑問で、私の考へでは恐らく日本も、アメリカや英佛と同樣、すべての職工農民が、それぞれ自動車の一臺も持つて明朗快活にその日を送つてゐたに違ひないと思ふのであります。

ところが、日本の資本主義は、當時はまだほんの西洋の眞似事で、世界戰爭のお蔭をかうむつた場合は兎も角として、一旦戰爭が終つてみれば、とても商品戰爭では勝てつこない。なにしろ一つとして平時の商業戰に役立つ程の優秀品が無かつたのだから、ガラガラにやられて了つた。實にその時の慘狀と云ふものは怖ろしいもので、それが資本家を片端から倒し、職工、小商人、延いては農民に迄も、物凄い程の重壓を加へました。

そこで戰爭後の一大打擊のあとに、本來からすれば當然全滅すべき筈だつた日本の資本主義が、しかし燒野に芽を出したやうに、初めて世界の情勢に適應しなければならぬ事を知り、根柢からその方針を變へて出直ほして來たのでありますが、この間二拾年の苦闘と云ふものは實に容易ならざるもので、これが、この頃になつて初めて、もう戰爭なぞなくつても大手を振つて世界中の商業區域へのさばる事の出來る品物を、しかも西洋のどの國の製品よりも遙かに安い値段で造ることが出來るやうになつたのであります。

三、目的達成に到らんとする日本產業

これは、諸君も十分に御承知のことと思ひますが、今日世界の恐怖は、日本製品がどうしてこんなに安く、上手に出來るのだらうと云ふところにある。若しこの儘自由競爭に任して置けば、世界中の工場はみな日本の工場にぶち倒される。世界中の金がみな日本に吸ひ寄せられる……と云ふので、猛烈な問題が起つて來たのであります。

そこで、全世界の國々は日本商品に對して途方もない關稅をかける。本國は勿論、

自分達の植民地に迄強制して、例へば一圓の品物に一圓五拾錢もの稅をかける。それで何んとかして日本の品物を排斥して、日本の工場を立行かなくさせやうと試みてゐる。ところが日本の工場も仲々それでは參らない。幸ひに日本は水力國で機械動力が甚だ安くて且つ豐富である。それに職工が安價な報酬に甘んじて且つ勤勉である。剩さへ對外圓價の低落を利用出來る現在に、何んとでもしてこの際世界中の市場を自分達の手に入れやうとする。實に今日日本の資本主義が、全世界の資本主義に對して鬪つてゐる有樣は、陸海軍が諸外國の『鐵の環』に對して張り合つてゐるのや、外交陣が强硬論をふりかざしてゐるのと比較して、決して優るとも劣らない狀態なのであります。

若しここで日本の資本主義が外國の資本主義を破ることが出來れば、これは大したことになる。現にエチオピア戰爭の如きだつて、これはよくよく根本を考へてみると、どうやら日本商品の進出がその根源をなしてゐると云つてよい。

伊太利は、どうかしてエチオピアを自分の屬國同樣にして、自分の國の商品賣捌地にして了ひたい、それで他國からの輸入品にはうんと關稅をかけ、自國の品物をここで賣りたい。若し現在のやうな獨立國で押し通される場合は、何んとしても一番安くて一番上等な品物を輸入することになるので、いくら運賃がかからうが何にしやうが日本品が第一等と云ふことになる。日本は今度の伊エ戰爭に對しては、あまり喙を容れてゐないが、實はこれは仲々簡單には濟まされぬことである。エチオピアにして既に然り、印度、蘭印に至つては云ふを待たない。支那は御承知のやうに隣國ではありながら、外交の失策にもよるだらうが、決して日本の優勢になるのを希望してゐない。なにかと云へば日本商品のボイコットをやり、出來るなら早く自分達の國にも日本に負けない資本主義を擁立して日本品を喰ひ止めやうとする。そこで西洋の資本團がこれをめざして續々と支那に這入りかかつてゐる。若し支那に工業技術が發達して、どんどん資本がおろされたとしたら、一日十錢もあれば十三時間でも十五時間でも働

くと云ふ勤勉無類の支那職工の敵には、流石の日本職工でも勝てる筈がない。

して見れば今日國家を擧げての最大なる問題は、日本の資本主義が西洋の資本主義に對して勝つか負けるかと云ふ瀬戸際に立つて居ることであります。ここで負けたら日本の資本主義の沒落と同時に、資本家は勿論、中商工業、職工農民に至る迄一齊に全滅すると云ふ運命になつてゐる。しかし、幸ひにして勢ひに乘じて世界の市場戰に勝てば、今日迄の富强國、英國なりフランスなりアメリカなりの狀勢を自然に日本にうつすこととなつて、日本の勞働者、農民の生活が非常に豐かなものになり、それこそ一日六時間の勞働で、他は自分の娛樂にいそしむと云ふが如き理想境を現出することさへ決して夢ではないのであります。

四、弱國の貴族よりは强國の勞働者

熟々現今の世界の狀勢を見るに、勞資の問題、貧富階級の問題も問題であるが、アメリカの勞働者なぞは優に日本の重役位の贅澤な生活をしてゐるし、また英國の勞働者なぞ、たとへ失業しても、月百五拾圓位は默つてゐても政府が呉れる。フランスには大體失業者と云ふものが無いし、勞働者の生活これまた日本の課長級位の生活をしてゐる所を見れば、資本家だの中產階級だの云つても實際日本の場合なぞは可哀相なものだ。しかし、可哀相と云へば、一たびロシアを見、支那を見、更に印度、南洋、アフリカ等を見れば、下には下があるもので、これではいくら大變だやり切れないと云つても、日本の勞働者なぞはそんな國へ行けば、またたく間に贅澤極まる人間になつて了ふ。私なぞ諸外國を眺めて來たものの眼で見ると、第一の問題は國家の問題で、强い國家に產れたものは何んと云つても得である。貴族にならうが富豪にならうが、亡國の民では强國の一勞働者にも及ばない悲慘な生活をしなければならない。考へて見ると、日本も明治維新以來大變な進步で、昔は百姓や町人では絹の着物一枚着たことがなく、白い米飯を喰べた人間と云へば餘程贅澤な人だつた。それでも人々はみな

誰に不平を云ふでもなく、孜孜として自分の業務に就き、一生を働き拔いて來た。實際その當時と云ふものは、今日の支那と同じ狀態だつたのが、僅か五六拾年の奮鬪によつて、もはや今日では芋を喰つて一生を終つたなぞと云ふ人間は、乞食にしたつて居ない。

試みに、お老人に聞いてみれば一番よく解るが、實にこの間に於ける日本人の生活の進步發達と云ふものは怖ろしい位で、これはすべて日本の國家が富强になつた證據に外ならない。勿論戰爭も强かつた。しかし日本がいち早く外國から資本主義を奪ひとつて、これを自國に發達させた商業戰の勝利から、大半の理由が來てをる。勿論一部資本家には怪しからん考へを以て、怪しからん事をした人間もあらうが、大局から見て、日本に今日のやうな大資本が起らなかつたら、今日世界を對手にして大見榮を切るやうな飛び離れた藝當は全く出來なかつたに違ひない。さういふ譯でありますから、今日勞資問題なぞで、下手にこの旭ののぼるが如き國運を躓かせるやうなことが

あつては、それこそ大變な結果になる。

五、世界資本主義の現狀

世上、往々にして資本主義は行きづまつたと云ふ。ところがどうして決して行きづまつてはゐない。成る程英國やフランスやアメリカの資本主義は沒落しかかつたかも知れんが、日本の資本主義はこれからであります。大體、西洋に資本主義の勃興し始めたのは十九世紀初頭で、最初は國內的のものが自然對外的となり、早く資本主義に就いた國が他國の富を自分の國に吸ひ寄せたため、どこの國でも先を爭つてこれを眞似した。隨つて西歐諸國は競爭が激烈となり、忽ち商業區域は、植民地や未開國に向つて擴げられるより方法がなくなつたのであります。それで最初は材料を集めるために利用された植民地や未開國が、今度は加工品の賣捌地となつて、植民地や未開國の富がみな文明國に奪はれる事となつた。勿論最初は自由競爭にまかせられてゐたが、

廿世紀に這入つてそろそろ行きづまりを呈して來て、それぞれ自分の繩張りを他國におびやかされぬやう關稅策など用ひて、自國の資本主義を擁護しなければならなくなつたのであります。

それで西洋諸國から見れば、百年近くも立ち遲れた日本の資本主義が、やうやく陣容を備へて立ち上がつた時には、萬事まことに都合の惡い世界の情勢となつてゐた。先づ第一に昔のやうに植民地と云ふものが殘されてゐない。材料を仕入れるにも、加工品を賣り出すのにも、一々他國の繩張りの御機嫌を伺ひ、利益の半分位は稅金として收めなければ商賣が出來ないやうな有樣になつてゐる。しかしそれでも日本の資本主義はかかる艱難と闘つて負けないだけの底力を現在のところでは示してゐる。何よりも强いのは資本家の腰がねばり强い。勞働者の賃銀が安い、國民全體が未だ贅澤の頂上に達してゐない。誰を見ても皆石に嚙りついてもやるぞと云ふ元氣に充ちてゐる。國家的地位から云つても非常に惠まれてゐるが、國民的素質から云つても頭がよ

くて困難に堪へ得る習性がある。少々の關稅位にはどクつかないだけの品物を極く低廉にどしどしと製り出す。これでは何處の國でも、日本を對手に太刀打ちは出來ませぬ。

現在では世界中日本の商品の行きわたらぬ國は一つもなく、甚しい例は、印度人の賣る更紗も、エヂプト人の賣る土產も、或は巴里エッフエル塔上で賣る記念品の如きさへ、すべてみな日本製の商品なので、かかる結果を齎した今日では、世界の恐怖はひとしく日本の產業に向けられ、もはや事此處に至れば一致協力、未だ國力を失墜せぬ間に、西洋の諸大國が、本國は勿論、自分達の植民地を總動員して、にはかに立ち現はれた日本の手足をもがうとする。……つまり、非常時と云ふのもここにあるので、この非常時を日本が首尾よく乘り切ることが出來れば、日本は云ふ迄もなく次の時代の世界の大王である。

六、勞資は對立抗爭すべきものに非ず

私は今日、世間からは資本家の一員と見做されてゐるものであるが、私なぞはとてもとても資本家なぞと云ふ大したものではなく、依然として一勞働者に過ぎない。ただ併し、なれるものならば堂々たる資本家になり、多少とも國家のためにお役に立ちたいと思ふ希望は勿論懷いて居るのであります。

先にも申したやうに、元來私は甚だ貧しい家庭に生れ、しかも大多數の兄弟の中の末子で、教育一つ碌々受けることが出來なかつた。いくらかでも學んだのは、自分の力にたよつて苦學をした程度である。しかし、私達少青年時代には、自分の苦境なぞ不平がましく云ふ人間は一人もなかつた。私も自分が悲慘な境遇だなぞとはこれつぽちも思つた事はない。ましてこの世の中に資本家と勞働者の二つがあつて、それが敵のやうに睨み合つてるものなぞとは考へた事もない。人はそれぞれ勞働者でもあ

れば、資本家になる卵でもあると考へてゐた。今日資本家と呼ばれるものも殆んどみな前身を洗へば勞働者が大多數である。勿論今後といへども、勞働者は永遠の勞働者、資本家は永遠の資本家なぞと考へたら途方もないあやまりであります。

ところが最近ロシア的思想が大分日本にも這入つて來た、成る程革命前のロシアの狀態を見れば今日のロシアが出來たのも、故なき事ではないと思ふ。大體ロシアは貴族と地主との國で、その他のものは奴隷だつた。偶々日露戰爭で敗け、歐洲大戰で疲勞困憊したところへ、ユデア人の宣傳家が一齊に國民をけしかけた。……お前達がこれ程弱つて了つたのは貴族と地主が惡いからだ。そいつらを失くして了へば必ずお前達の希望するやうないゝ狀態になる……それで、あの革命が起つた。ところがその結果は十何年を經た今日一向更まらうとはしない。

モスコーの町を走る自動車は、役人と軍人とのもので、その他の人々はみな裸足で雪の中を歩いてゐるやうな有樣だし、親の判らない孤兒が大群を組んで流浪してゐる。

僅に都會地の兵隊と職工だけは人間らしい生活をしてゐるが、田舍の農民なぞの生活に至つては帝政時代よりもひどい。唯この國家は、若い、力のある、反逆心の强い青壯年だけは優遇する。軍人なり職工なりに仕立ててこれだけは大切に保護を加へる。しかし年を老つた人間や子供は人間の仲間に入れて貰へない。つまり、昔の貴族や地主に代つて、ユデア人が國家を乘りとつたと思へばいゝ。あれ程勞働々々と云つて資本を嫌つたロシアが、今日ではもはや手の裏をかへすやうに資本家の擁護を始めた。さうしなければ國家がほろびるからであります。

七、他人の煽動に自家を滅ぼす勿れ

幸ひにして、日本には日本人だけでユデア人がゐない。これ程純粹な國家と云ふものも世界に類が無い。結局反逆者だの何だのと云つても日本の場合は多く日本の前途を憂へて起つた志士が多いので、今日、日本にロシアの思想を植ゑやうとする人も多少はあらうが、これと云ふのも、その考へ方にあやまちがあつたり、到らない所はあるにしても、必ずしも根からユデア人的根性を持つてゐるとは見做し難いのであります。

しかし、誰の眼から見ても、ロシアの思想をその儘日本にうつし植ゑやうなぞと云ふのは、日本の基礎を根柢から覆へすものであることは斷言出來るのであります。知らずして過を犯すものはこれを改めればいい。しかし、若し假りに知つてゐてこれを行ふものがあるとすれば、これはまことに容易ならぬことで、つまりこれは、唯個人としての不平不滿から、民衆を煽動して國家の大本をくつがへし、その危機に乘じて自分一箇の權力を得やうとする賣國逆賊の徒である。かかるものは一刻の猶豫なく殲滅しなければなりませぬ。

偶々斯くの如き奴輩が、口に勞資問題を叫び、小作問題を論じ、甘言を以て山漁農民、小商工業職工等を誘惑し、煽動するとすれば、はたしてこれに欺かれない人間

が何人あるか、私は實に心細く思ふのであります。

最近、人生の勞苦も碌々味はつてゐない生白い知識階級中、自らの努力を嫌つて世に捨てられ、不平不滿の揚句、にはかに甘言を以つて一般善良なる國民を煽動するもの無しとは云はれないのである。かくして都會には隨所に資本家勞働者の對立的抗爭があり、地方には地主農民の不調和が起り、ここに第三者たる遊民的煽動家が現はれて、次第にこの風波をたかめて行く、結局獨り利益を占めるものは煽動家だけであつて、地主も農民も、皮を喰はれ肉を喰はれ、最後には骨迄しやぶられる事となる。少くとも我が鄉土にあつてのみは、かかる悲劇中の悲劇がよもや起さるることもないと思ふが、それかと云つて必ずしも安心出來得るものとは思はれないのであります。

大體、一家の爭ひでも親身同志の爭ひと云ふものは、たとへ一時常規を逸しても、すぐ又元通りに丸く收まるものであるが、一たびここに他人が這入つて爭ひが起きると、後で仲直りをしやうとしても、もう追つつかない事になるものであります。よ

くよく注意すべきはこの點で、もともと一家の如くにやつて來た勞資或ひは地主小作人の間に、かかることが反省もなく深められて行けば、もう日本の前途もそれが最後と言ふの外ありません。

人或は稱して時勢の變化を理由とし、階級組織の病弊を不可避の問題として、かゝる私の言說を二十年前の愚論の如く見做すやも知れないが、階級貧富の問題は必ずしも今日に始まつたものではなく、遠く數百年來盡くる所なきものである。凡そ物を謀らんとするには過去を知つて現在に處し、現在を貫いて將來に鑑みるのが常道であつて、私の言はんとする所も二十年前の夢を語つてゐるのではなく、寧ろ二十年後の今後にかゝつてゐるのである。

資本家たるものも勞働者たるものも、或ひは地主たるものも小作人たるものも、よくよくここに意を致して善處しなければ、その結果は居ながらにして國家を燒き亡すことになる虞れがあるのであります。

が何人あるか、私は實に心細く思ふのであります。

最近、人生の勞苦も碌々味はつてゐない生白い知識階級中、自らの努力を嫌つて世に捨てられ、不平不滿の揚句、にはかに甘言を以つて一般善良なる國民を煽動するもの無しとは云はれないのである。かくして都會には隨所に資本家勞働者の對立的抗爭があり、地方には地主農民の不調和が起り、ここに第三者たる遊民的煽動家が現はれて、次第にこの風波をたかめて行く、結局獨り利益を占めるものは煽動家だけであつて、地主も農民も、皮を喰はれ肉を喰はれ、最後には骨迄しやぶられる事となる。少くとも我が鄉土にあつてのみは、かかる悲劇中の悲劇がよもや起さるることもないと思ふが、それかと云つて必ずしも安心出來得るものとは思はれないのであります。

大體、一家の爭ひでも親身同志の爭ひと云ふものは、たとへ一時常規を逸しても、すぐ又元通りに丸く收まるものであるが、一たびここに他人が這入つて爭ひが起きると、後で仲直りをしやうとしても、もう追つつかない事になるものであります。よ

くよく注意すべきはこの點で、もともと一家の如くにやつて來た勞資或ひは地主小作人の間に、かかることが反省もなく深められて行けば、もう日本の前途もそれが最後と言ふの外ありません。

人或は稱して時勢の變化を理由とし、階級組織の病弊を不可避の問題として、かゝる私の言說を二十年前の愚論の如く見做すやも知れないが、階級貧富の問題は必ずしも今日に始まつたものではなく、遠く數百年來盡くる所なきものである。凡そ物を謀らんとするには過去を知つて現在に處し、現在を貫いて將來に鑑みるのが常道であつて、私の言はんとする所も二十年前の夢を語つてゐるのではなく、寧ろ二十年後の今後にかゝつてゐるのである。

資本家たるものも勞働者たるものも、或ひは地主たるものも小作人たるものも、よくよくここに意を致して善處しなければ、その結果は居ながらにして國家を燒き亡すことになる虞れがあるのであります。

八、施政上の大本、人心の和

大體私の考へでは、國家の繁榮の基礎は國民の共存共榮に在ると思つて居ります。一方的繁榮を擁護して他方に犧牲者をつくる事は最も戒めなければならない。產業貿易のみを發達させても、農民の生活を打捨てて置くやうでは肝腎の國礎を過るだらうし、農民の生活のみを大切にして小商工業者を無視するわけにも行かない。例へば農民生活の利便のために購買組合をつくるのはいかにも理想的ではあるが、そのために商賣人達の受ける打擊がどう云ふ結果を齎すかを考へたならば、必ずしもこれが最上の策とは云ひ得ざるが如き、その一例であります。

國防が緊急だと云つても、過大なる軍費の爲めに國家經濟が破壞されたり、國民生活が萎縮するやうだつたら何んの意味をもなすまいし、反對に又國民生活の安樂ばかり目的として國防を怠つたら、一朝事ある場合に國家を危殆に瀕せしむる事は火を睹

るよりも瞭であります。

隨つて國政の運用は、時勢に順應して矯激なるを戒め、偏倚的なるを排し、一般國民また共存共榮を目的として、お互に多少の不都合は忍び合はなければ、大成を期する事は困難であります。

更に社會制度の硬化は出來るだけこれを避けなければならない、人材の登用を自由活潑となし、一給仕からも大臣たるの途をひらき、一兵卒よりも元帥大將たり得る資格を與へ、資本の偏在や、知識の學閥化を打破しなければなりませぬ。金持の子がいつ迄も金持であり、貧乏人の子がいつ迄も貧乏人で終るやうな不公平は、結局社會制度の硬化、腐敗を物語る所のもので、いかなる階級、職業に拘らず、全國民が喜びを以つてその現狀に働き、希望を以つて將來に前進出來てこそ、眞に健全なる國家を形成することが出來るのであります。

この事は、畏くも明治大帝が明治元年三月、維新の大業をお終へになると同時に、

直ちに一般國民にお示しになつたかの有名な五箇條の御誓文の中にも『官民一途庶民に至る迄各々その志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す』……とある位で、かゝる優渥なる御聖旨は當然わが國政上に於ける重要なる根幹となつてゐなければならないものであります。

しかしながら、當然行はれなければならない施政上の大本も、どうかすると行きづまりを呈したり、硬化したりして、人心を不安に陷れる場合が無いではない。そのやうな際に、利己主義的な打算なぞを以つて、汲々として自己一身の安全のみをはかるやうな事があつたり、或は自暴自棄的發作から他を陷れんとするが如き事あらば、禍ひは必ず國家に及ぶのであります。

今回の所謂、二、二六事變によつて一大混亂のさ中から浮び上がつて來た非常時內閣なぞが、口を極めて更始一新と叫ぶのも要因はここに存するのであつて、第三第四の不祥事件を未前に防がんとすれば、勢ひ國民生活の硬化と不安を去つて、一日も早く人心の融和躍進を望まなければならないのであります。國民としても勞資そのいづれを問はず、自らその本分を知つて嫉視爭鬪を避け、協力一致國難に當らなければ悔を百年に貽すこととなるのであります。

九、領土か然らずんば外交

明治以來日本國內の財政狀態が、驚異的躍進を遂げた事は前にも述べたが、しかしながら、これを歐米の富强國に比すれば實に未だ物の數にも足らない貧弱さであります。國內には猶ほ相當の失業群があり、小商工業者は最大限の勞力を以つてやうやく飢餓に瀕しない程度であり、五百萬戶の農山漁村民は擔負ひ切れない負債の下に益々その狀勢を惡化するが如き傾向をさへ見せて居るのであります。

かかる折柄對外的には曩に國際聯盟を脫退し、今又軍縮會議を脫退したる爲め、四面楚歌の狀態であります。英米が厖大なる再軍備をすれば、我も亦面目上これに對

抗しなければならないだらう。だがその經費は如何にして捻出すべきか、單に滿洲國を安定せしむるについても、今後幾年となく或ひは幾十年となく、經常費を編成しなければならない。しかも今日これらの經費は絶對外債に仰ぐことは出來ず、勢ひ更に手段を盡して内債を百億以上募らねばならない有樣である。その結果惡性のインフレーションを惹起するか、若しそれを避けるとすれば增稅の止むなき次第で、ここに一齊に國家の産業の大躍進でも無い限り、或ひはいかなる事態を生むやもはかり知れないものがあります。

日本の産業界が、既に全世界を對手にしてその關稅戰やボイコットにも拘らず破竹の勢ひを以つて、世界制覇の途に就いてゐる事は前述の通りでありますが、つまり日本資本主義の發展制覇によつて好轉させられない限り、日本の富源は前途を失ふであらうと云ふ私の考へは、たまたま今般の非常時内閣の根本政綱たる馬場聲明にも殆んど同樣の意見が述べられて居ります。卽ち

『我が國現下の情勢は誠に文字通りの非常時であるが一面において國運の興隆、産業、貿易の伸展は眞に見るべきものがある。而して此趨勢は今後とも益々助長すべきことは言を俟たざる所であり、又この發展があつてこそ我が財政は安固なるを得るのである。但し右の如く私が産業貿易の發展を强調力說する所以のものは決して一部財閥の利益を擁護するとか負擔の不均衡をすてて顧みないといふのではなく産業貿易界を發展せしむることによつて初めて財政の基礎を强固ならしむると云ふ意味である。』

しかしてこの馬場財政の暗示する所に據れば、高橋財政の志した公債漸減主義乃至維持方針を積極的に膨大せしむるも致し方なしとするばかりでなく、現狀を萎縮せしめない範圍内にあつては、特殊の增稅を加重するも已むを得ずと見做してゐるやうであります。

その點では、新興日本の産業界に對する認識に於ても、また抱負に於ても甚だ明快

で、自信力を有する馬場政策、つまり廣田内閣の根幹となるべき新政綱に對して、私は少からざる同感を持つものであるが、さればと云つて我が産業界がいかに全世界の反感と敵意との重圍に陷り、今更ら邦國の領土的無能さを暴露し、外交的失策に災ひされてゐるかを思へば、必ずしもにはかに賛同し難い苦悶を抱かずにはゐられないのであります。

思ふに今や世界制覇を試みんとする我が産業界にあつて、最も必要缺くべからざるものは、領土か否らずんば外交であります。たまたま邦國にあつて非常時を告ぐる時、西歐諸國間にあつては戰雲既に搖ぐかと思はるる重大危機を胎んで、間一髪のあひだに運命を横たへてゐるが、若し一朝にして歐洲の大勢が覆れば、坐して天運に乘ずるが如き好機が邦國を一躍せしむる事は自明の理ながら、歐洲諸國もそれぞれ戰爭の不利を深く心魂に徹して戒めてゐる以上、他國をして有利に導かしむるやうな最後の一線をよもや踏み超える事は無いであらう。とすれば、西歐國際間の危機なぞを、漫然として待つわけにも行かぬ現下緊急の際に、邦國は邦國としての百年の計を樹てなければならないわけであります。

一〇、平田群島

そもそも私が、二十年前南海を志して飄然臺灣に至り、それより南支、南洋方面に來往したのには深い理由がある。勿論生國の懐しい山河に惠まれて一生を安らけく送るのは人生の最大幸福ではあらうが、しかし國家の狀勢を見れば、安閑として內地の米を喰つてゐる時ではなく、一人でも多く國外に職場を求めなければならぬと思つたからであります。

當時既に、日本の土地は日本の國民を容るゝに廣いものではなかつた。と云つて何處を探しても植民地として殘されたやうな土地もなく、歐米人の勢力は全世界を蓋うてゐる。將來必ずや人口問題、食糧問題、土地問題によつて日本人が怖るべき難

關に出遇ふだらうと云ふ事を私は考へてゐた。その結果考へらるるものは、西歐の列强と戰つて植民地の公平なる再分配を要求するか、さもなければ東洋の諸弱國を卒ゐてここに東洋聯邦の畫策を樹てるか、いづれにしても將來日本の到達する運命が、私には眼に見るが如く思はれたのであります。

若くして健康に惠まれた私は、自らを軍隊と見做し、自らを外交官と思ひ、やがては起るだらう國勢の轉機を想像して、爾來廿數年、一平民として一實業家として一勞働者として、南支、印度支那、シアム、印度、南洋諸島、フイリッピン等を波浪に生死を賭け、病魔惡獸と鬪つて今日に至つたものであります。

その間、無人島の新發見は數次に止まらないが、偶々歐洲戰亂前後鳥糞燐鑛肥料採掘のため平田群島に數百名の土工を連れて事業を經營し、特にこの群島の地勢と位置が、今後軍事上極めて重要なることを察して、日本領土として確保されん事を當時の政府に訴へたのであります。大體、新島發見の場合は、自らその島嶼に住居し、拾ケ年のうちに他國から苦情が持ち込まれなければ、その國籍が該住民の母國に決するもので、平田群島の場合の如きも、私は臺灣總督府を通じて香港政廳に問ひ合はせ、その所屬の決せざるを確めて、しかる後に日本政府にこれを訴へたのであります。然るに、當時は全世界に戰後の平和氣分がみなぎり、當路にあつてもさのみ問題とはされず、荏苒日を過ぎるうちに反つて支那政府がその領有を宣言して了つたやうな次第で、やがて拾年以上も經過した一昨年、突如として佛蘭西政府が南洋航空路の基點として新南群島の領有を宣言するや、にはかに平田群島も又新らしい問題を提起するやうな結果となつたのであります。尤も政府の政策と云ふものは、常に世界情勢に順應して前後の處置をあやまらないやうにしなければならないものであるから、あの當時平田群島の領有を宣言して、軍事的野心を全世界に知らるると云ふが如きは避けねばならない事であつたのかも知れません。國策と云ふものは甚だ深遠なもので、にはかに一箇の私見を以つて私議すべき性質のものではないが、一旦事ある場合平田群島がいか

なる活作用を爲すかは、刮目して見て頂き度いと思ひます。

二、當面せる軍事的危機

時勢は幾變轉して、宛も私が青年時代に豫言したと同樣な運命が、今や邦國の上に疑ふべからざる影を落して來たのである。世界植民地再分配は、もはや全世界の避け得ざる問題となりつゝあるし、また日本を盟主とする東洋聯邦の實現も、既に滿洲並に北支五省を眺むれば、兎角の論議をゆるさない筈であります。

實に國運を乘せて明日へ進發する今日の日本產業を、完全に成育させん爲めには、必ずしも現下の狀勢が背を向けてゐるものとは思はれないが、先づそのためには强力無比の自主的外交が先發し、後陣に陸海空軍の實力が最後の躍動を內に籠めて控へなければならないと思ひます。

財政的孤立は前にも述べたが、更に軍略的にも、警戒すべき孤立に擠れてゐる日本の現狀は、もはや誰しもの認むる所であります。

支那人はその古い惰眠主義から目覺めて、軍事及び飛行機に甚だ意識的となつた。ソヴエート・ロシアは、近代的戰鬪に訓練されて日露戰爭當時から見れば、遙かに强大な軍隊を滿洲の國境に集中し、その員數は八十萬以上と云はれ、暗に佛國との緊要なる協定がこれを援助せしめ、ウラジオストック及びその他の太平洋諸港には潛水艦を浮べて、日本船舶を襲擊するは勿論、東京、大阪をも一擧に爆擊粉碎し得る丈けの大飛行隊を編成してゐます。

自ら東洋の防禦者を以つて任じてゐるイギリスは、シンガポールに巨大な海軍根據地を再建し、カルカッタの新要塞と相まつてその最も新しい三月十一日夜の報道によれば、今日迄の黑海、地中海艦隊の餘力を南支那海に集中し、在來の東洋艦隊に倍する軍艦、潛水艦、飛行機の大編成を爲し遂げたばかりだと傳へられてゐます。偶々その名目とする所は支那海の海賊掃滅に在りなぞと稱してゐるが、その目的眞因の奈邊

にあるやは推察に餘りあるものだし、アメリカは既に太平洋の主人として大艦隊を移動させて以來、更に又新艦隊を建造して何處迄擴張強化を試みる氣やら底の知れないものがあります。

すべてこれ等の反對發展は、これを合すれば優に世界最大強國を斃すに足りる脅威で、フランスが先にドイツの周圍に築き上ぐべく試みた軍事上の『鐵の輪』に倍するものが、今日著々として日本の周圍に造られてゐるのであります。

しかも今日邦國の財源を見れば、いかに贔屓眼に見ても永年の大戰爭に堪へ得るかどうか、石炭は兎も角として、鐵と石油は忽ち底をつくし、食糧は失はれるだらうし、その他の物質もたちどころに消え去るであらう。將に非常時の非常時たる最後のものは、産業、外交の後に來る軍事に至つて盡るのである。しかしながら、安全を期するところに一歩の前進もゆるされない刻下の世界情勢に於ては、火を點けない銃は唯敵を乘ぜさせるのみであります。

嘗て日本が遭遇せるいかなる危機よりも、現に我等が直面するところのものは、遙かに急激にして悲壯である理由が、これで初めてうなづかれることと私は思ひます。運命の前に忠實なるものは眞の勇者であると云はれてゐるが、明治以來の鍛錬によつて訓育された新興日本の國民が、此の當面の難局に對していかに善處すべきかは、決して明日の問題でなく、今日眼前の問題である所以も、これによつて明かにされたものと考へるのであります。

三、結　論

かくて、非常時の今日全世界に向つて我等が築ける砲陣は

一、産　業　陣
二、外　交　陣
三、軍　備　陣

以外には無いのであります。

若し第一陣に破れんか、第二陣によつて敵を撃つべく、第二陣陷いらば、もはや殘るところは第三陣のみであります。

第二陣は第一陣よりも壯烈を極め、第三陣は第二陣に百倍する凄味を加ふる事も亦申す迄もありません。その事前の構築に最善の用意を拂ひ、一失をも遺さざるは勿論、望むらくは第三陣に至るなくして敵を壓服せしめねばならぬと思ひます。

一度び第三陣に至るや、もはやこれは最後の最後なるものであつて、その後に待つものは唯鮮血と死屍との山河に輝き出づる勝利か、さもなければ焦土に一片の白骨をも遺さざる絶滅かの二途の外ないのであります。

極言すれば、光輝ある皇國三千年の歴史も、僅に今日の爲めにあつた、炳として日月と競ひ、萬岳をゆるがす宗祖皇統連綿の偉業と大統も、決するところはここにあつたのである。

億兆蹶起して、萬乘の　聖天子に隨ひ奉り、神國の神命に應ふるは將に今日をおいて、またいつの日にかあらう。不肖私が自ら駑鈍に鞭うつて、憂を同うし、且つ又自らのおもむかんとする所を求むるの士に檄する所以であります。

かかる非常緊急の際にあつても、自若としてその家業にいそしみ、非常時を克服する所に天下青壯年の道がある。自力更生の眞の意味も、凡そ懸かる所は此處にある。

暗雲低迷する非常時と雖も、天意は輝き人道は拓け、英才あらば一勞働者たりとも大政治家、大實業家、大地主たるに難くはない聖代なる故、卑屈なる精神を捨てゝ緊褌一番奮起し、錯誤せる階級的意識や自暴自棄的妄想を拂はなければならぬ。

眞率にして、己を知るの青年であるならば、假りに非常時のいかなるものかを知らずして業務に沒頭するとも、國家はこれを用ゐるに吝かでない。論爭を避け遊惰安逸を排して、各々その天職を全うせば、大臣、大富豪、大地主たること亦また決して難くはないし、かかる青年こそ非常時の求むる唯一無二の日本國民である。

不肖の如きも、今日實業家と云ふには未だ遙かに遠いものであるが、鈍骨半生の苦闘によつて自らの運命を切り拓き、國恩に報いん事を一生の念願とするものであります。もともと私は一貧民の兒であつた。何んぞ死衣を飾るが如き必要あらんやと思つてゐる。

最近の國情に鑑みて、深く感ずる所あり、拙なき一文を草して特に鄉土の青年諸君に微意の存する所を訴へた次第であります。幸ひに一讀を賜らば洵に光榮の至りに存じます。

昭和十一年四月三日印刷
昭和十一年四月五日發行

非賣品

臺灣高雄市湊町
著者兼印刷發行人　平田末治

東京市芝區田村町五ノ十五
印刷所　文正堂印刷所

不許複製

52
28